

「紫外線浴室案内」（吉田家文書〈上関町〉追加25）



天気 ⑦

日光浴から紫外線浴へ(1)

《紫外線浴室》

上の写真は、熊毛郡上関村（現上関町）の私立病院に設置された紫外線浴室の利用を呼び掛けるリーフレットです。説明文によれば、紫外線は「生命の源泉である」と言っても過言ではなく、「太陽の約八倍の紫外線を発生」させるこの装置の効能が次のように書かれています。

「食欲増進し、血色良くなり、体重増し、心が活潑となり、感冒を予防し、睡眠充分となり、皮膚は強くなり、夜尿止まり、咳嗽を鎮静し、疹痒癩を治する等、虚弱者は健康となり、多数の疾患は治療の日数を短縮することになります」

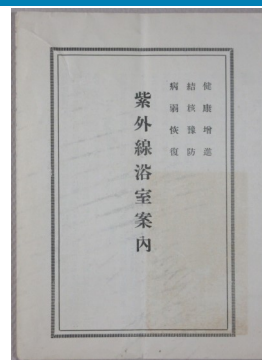
紫外線浴室は、医院から病院への転換を記念して設置されたものでした。つまり、新規開院の宣伝効果が期待できる装置であったといえます。リーフレットに発行年の記載はありませんが、こうした装置による紫外線の利用が多くみられた昭和初期のものと考えられます。

そして、紫外線浴室設置の目的として説明文の冒頭に記されたのは、「国を滅す結核病」の流行でした。

《結核の流行と対策》

産業化や都市化の進行を背景として、明治後期頃には結核患者数・死亡者数が増加の一途を辿っていました。人工気胸術の導入やBCGワクチンの開発など、新たな治療・予防法が登場しつつも、普及には時間を要しました。高額な費用が必要な入院治療を受けられる人は限られ、大正8年(1919)の結核予防法制定をうけて公立の結核療養所が各地で設立されたものの、患者数に比して十分な数ではありませんでした。

山口県では、大正元年に私立の虹ヶ浜病院が設立されましたが、病床数は僅か21床でした。公立の小串療養所が設立されたのは昭和14年(1939)になってのことであり、県内の結核による死亡者数は毎年2000名以上にのぼっていました。



紫外線浴室案内
(吉田家文書〈上関町〉追加25)

リーフレットを作成した病院名として裏面に「武内(内科)芥川(外科)病院」の記載があります。武内病院の医師である武内節三は明治39年(1912)に金沢医学専門学校を卒業した後、陸軍軍医として近衛歩兵聯隊に勤務し、退職後の明治45年に上関村で開業しました(『山口県史 下巻』昭和9年)。武内病院の前身である武内医院は内科・小児科・エックス線科が専門でした。

通俗的な医学書で勧められた結核対策は、栄養豊富な食事や空気浴・日光浴といった自宅療養でも可能な方法でした。中でも日光浴は、結核に限らず、皮膚の鍛錬など幅広い効果が期待できる健康増進法として推奨されていました。昭和初期には、屋内でも日光浴が可能な日光浴室(サンルーム)を備えた住宅が登場していました。

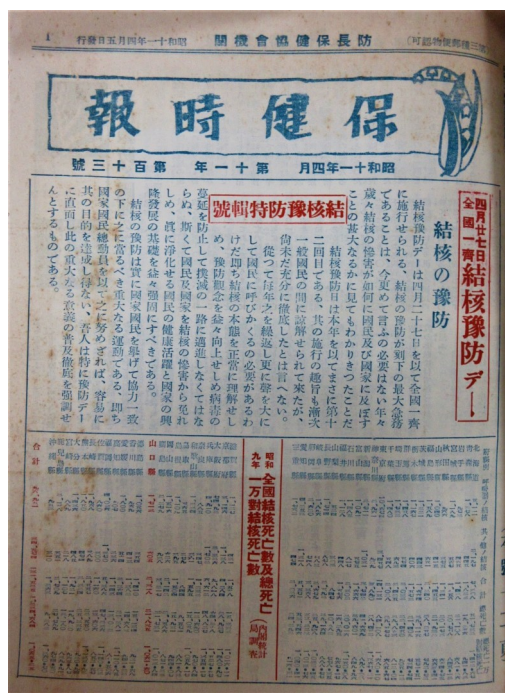
《紫外線の発見と産業界》

19世紀に入り、ヨーロッパでは日光に関する科学的解明が進み、赤外線や紫外線の存在が発見されました。殺菌など紫外線のもつ効果が明らかになった結果、20世紀初頭には日本でも皮膚科治療で紫外線の医療的利用が始まりました。さらにこの頃、くる病の予防や治療に有効なビタミンDが、紫外線により合成されることも明らかになりました。

こうした中で、居住地や季節に関係なく誰もが効果的に紫外線の効果を楽しむことができる装置が開発されました。それが、人工的に紫外線を発生させる紫外線ランプ(水銀石英灯・人工高山太陽灯)です。

このランプの製造に際し重視されたのは、電球部分で使用する紫外線の透過に優れたガラスの開発でした。第一次世界大戦の影響により、ドイツからの光学ガラスの輸入が途絶えたため、国内での製造が進む中でこの開発は進められました。大正末には実用化され、昭和5年(1930)には東京電気株式会社が紫外線透過ガラスを用いた一般向け紫外線ランプを発売しています。

なお、この頃の電灯会社は、水力発電による発電量の増加をうけた余剰電力問題を抱えていました。そのため、紫外線ランプの普及は、新たな電力需要を増加させる好機としても捉えられていました。



『保健時報』の「結核予防特輯号」

(防長保健協会『保健時報』第113号、昭和11年4月、片山家文書(阿東町)206)

全国で開催された結核予防デーとあわせ、防長保健協会機関紙では結核予防特集号が発行されました。1面に掲載された「全国結核死亡数及総死亡一万対結核死亡数」によれば、昭和9年(1934)時点における山口県の人口対1万人の結核死亡率は、中国5県で最多であったことが分かります。



土肥式太陽燈浴室

(『日本学校衛生』19(10)大日本学校衛生協会、昭和6年10月/国立国会図書館デジタルコレクション)

紫外線治療をいち早く始めたのは土肥慶蔵(東京帝国大学皮膚科教授)と言われています。皮膚科学・泌尿器科学で多くの業績を残した土肥が考案したこの装置は「土肥式太陽燈浴室」と呼ばれました。金属製で円柱形の装置内部には紫外線ランプが設置されており、利用者は内部に裸で入って紫外線照射を受けます。ただし眼を保護するためゴーグルの着用は必要でした。多人数(直径6尺の小型は約10名、直径9尺の普通型は約20名収容可能)が同時に照射を受けることができます。

武内病院のリーフレットで照射料に団体料金が設定されていたことから、同院の装置もこれと同様のものと考えられます。